

愛犬との ふれあいの俳句



夏

佐怒賀正美 選

特選

西瓜割り誘導員はベテラン犬

佐藤 優子

西瓜割の句はこれまでもたくさん詠まれてきたが、ベテランの犬が誘導員をしている句は記憶にない。ひよっとしたら、子どもに付き添っている盲導犬かもしれないが、夏の強い日差しの中、けんめいに自分の役割を果たそうとしているベテラン犬に共感した。

ジーパンを嗅ぐ犬に会ふ大夏野

新濃 健

広々とした夏野原を向こうから犬が走り寄ってきた。人なつこい犬で、作者のジーパンをくんくん嗅いでいる。この人はどんなところを歩いてきたのだろうかと推測しているようでもある。人を識別する一つの対象がジーパンの匂いであるというのが面白い。

大型の犬と組み合ふ暑さかな

竹澤 聡

去年も今年も異常な暑さがつづくが、作者は大型の犬を飼っているの、金太郎の熊とは違うが、ときどき愛犬と組み合せて遊ぶのだろう。犬も大型になるとけっこうな力と圧力をかけてくるに違いない。犬も作者も暑さなんかそっちのけ。いい汗をお互いにかく。

虹が出てくすぐったいな犬騒ぐ

濱崎 美伶

虹が出る愛犬がなにやら騒ぎだす。それを犬がくすぐったく感じているようだ、と感じ取ったところに作者の独自の感覚が働いている。抱いている犬が騒ぎだして動くのでくすぐったいとの読みもあるが、犬がくすぐったく感じているとの読みでよいかなと思う。

夕涼み犬の背を撫で風を待つ

古澤 昌彦

熱帯夜つづきの都会では、すでに夕涼みが死語になりかけている。この句は、夕方になると縁側や露台などに出て愛犬の背中を撫でてやりながら、夕べの涼しい風がそよぎだすのを待っている。すっかり寛ぎ合っている犬と作者の心の通い合いが羨ましいほどだ。

募集要項

■日本で唯一の「犬」をテーマにした俳壇です。愛犬とのふれあいの中で得た感慨を俳句にしてご応募ください。
■一般部門と児童・生徒部門（中学生以下）の2部門があります。
■原則として、五・七・五の17音でまとめてください。
■募集期間は「春」（1～3月）・「夏」（4～6月）・「秋」（7～9月）・「冬」（10～12月）年4回の開催で、開催ごとに最終月末に締め切ります。

■応募作品には、四季折々の「季節（季節を表す言葉）」を入れてください。
■郵送での送り先：〒101-8552 東京都千代田区神田須田町1-5（社）ジャパンケネルクラブ 広報課「愛犬とのふれあいの俳句」係
■ウェブでの送り先：左記QRコード・J K C H P の専用フォームより入力してください。
詳しくはこちらをご覧ください▼



入賞・発表

■開催ごとに以下の入賞句を選出します。
特選：5句
入選：10句
佳作：20句以内
児童・生徒の部入選：若干句
※入賞された方には、記念品（図書カード）をお送りします。入選句は会報誌『J K C ガゼット』に掲載されます。

入選

夏の浜待てを教わる黒テリア

植 朋子

西瓜割り小犬おそれて逃げまわる

岡部 晋一

フリスビーシロは飛び込む夏雲へ

窪田 千絵子

太刀尾が聳える空は夕立かな

段畑 遥香

水鉄砲口で受け止めはしゃぐ犬

平井 恵津子

佳作

ハンモック揺られサモエド悠然と留守番の犬へ冷えたる西瓜かな

秋山 廣人

はつぴ犬祭太鼓に尾を振れり

浅野 麻紀子

網戸越し別れを惜しむ犬と祖父

岩見 喜仁

片陰を外れず犬の歩みけり

鶴飼 克枝

お揃ひの半袈裟のイヌ夏遍路

内山 一輝

犬の名を呼び合ふ仲や夏木立

遠藤 幸子

角出せば犬の耳伏す蝸牛

大塚 恵梨香

夕立や犬の足あと泥の地図

上條 優斗

寝る前にアイス分け合う妻と犬

加茂 亘

老犬の眠る美術部青田風

北美 三風

夏草や尻尾も上がり野をかける

国領 柊

愛犬の好物キュウリ選び採る

平山 良志

紫陽花と鏡争い映る犬

松永 誠

夏草へ犬駆け出して吞まれけり

松村 浩子

古き人古き犬連れ夕涼み

山崎 重久

夏座敷母のLINEは犬ばかり

吉井 琳音

アイス食ふ卓の下より犬の目

杉田 楓華

二代目の犬おさがりの藍浴衣

高木 空

夏川へそりり伸ばすや犬の脚

津々 うちら

犬と見る海のまぶしさ古希の夏

中村 陽喜

ピザ釜にむせる子犬や夏の庭

三原 靖彦

木漏れ目を選んで犬と妻の墓

吉田 次雄

児童・生徒

さざ波に怯むチワワや夏休み

松尾 愛花（13歳）

夏祭り亡き犬の影ふとよぎる

岩田 莉咲（14歳）

愛犬が綿菓子となる扇風機

千葉 結菜（14歳）

散歩あと犬と並んでラムネ飲む

松尾 朱（14歳）

へそ天の仔犬をよそに燃ゆる夏

多田 憲太（15歳）